自然賛歌
―御手洗川の源流―

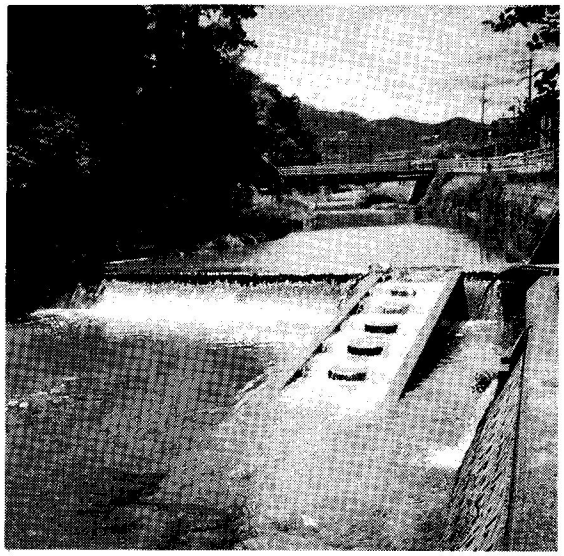
妹尾　治人

廿日市市を流れる六本の川のうち一番長い御手洗川（一〇、五キロ）の源流を求めて五月二日串戸の河口から野貝原山（七三三米）まで歩いてみた。

可愛川は荒々しい男川、御手洗川は穏やかな女川と言われるが、大方橋の付近からは流れは急になり川原橋辺からは川底に大きな石が見られるようになり、もう上流と言ってよいと思う。昔津和野街道の急斜面から馬が転落して死亡したのを哀れみ、馬が原に馬頭観音が祭られている。

御手洗川の堰には魚の遡上を助けるための階段が工夫されている。（写真参照）そのためか魚が沢山泳いでいるのが見える。中州には蔓葦（ツルヨシ）が繁茂し自然度の高い川でコサギが見られるのが嬉しい。

五月二日は八十八夜で天気もよくお茶摘みの婦人に何人も出会った今年の春は暖かく、新芽がはや五～六枚になっているが、新茶は葉先三枚で摘むのがよいとお婆さんが話してくれた。よく気をつけて見ると畑の隅や道端に茶の木があちこちに植えられていることを発見した。



佐太郎橋の少し下の所で烏帽子岩山を源流とする川が御手洗川に合流している。深い谷で、この辺でも石楠花（シャクナゲ）が見られるのではないかと思って山に入って見たが、天然記念物に指定された石楠花は深山のごく限られた場所だけらしく、ここでは一本も見ることは出来なかった。そのかわり少し登ったところに岩鏡、一薬草、銀竜草（ギンリョウソウ）等があり、これにひかれて烏帽子岩山の頂上（六三一米）まで登ってしまった。頂上付近は岩鏡の大群落でピンクの花は見事なものであった。二時間ほど道草をしたが、御手洗川の各支流を歩くとほかにも何か発見があるものと思う。

本流に帰り、明石集会所入口の所に建てられた「奇岩塔岩」の石碑を拝み、いよいよ野貝原山を目指す。明石大歳神社に参詣し、川のせせらぎを聞きながら舗装された林道を歩く。約二キロで終点、そこからは石ころ道となる。野鳥の声を楽しみながら山道を登る。林道終点から約一時間でのうが湖に到着した。御手洗川の源流はさらにこの上だと思うが藤蔓、ススキいばらが多く歩くことは出来なかった。

のうが湖をあとにして、のうがピラミッドのコースを歩いてみる。塔岩のほか高貴人墳墓、タイル岩、鏡岩、方位岩等の巨石がある。方位岩の少し上に国土地理院設置の一等三角点（七一九、五米）を見つけた。

昭和四十年に建築されたのうがホテルは、昭和六十一年五月に倒産のため閉鎖されたと聞く。ホテルを始め各種娯楽施設、別荘、牧場等は荒れ放題で、今ではゴーストタウンになってしまった。おまけにのうが湖の下の広場には古タイヤ、不燃ゴミが放置されている。見苦しい廃屋やゴミを早急に処理し、眺めのよい美しい自然の山に返したいものである。

御手洗川河口のカキ筏と水鳥の織なす風景は、廿日市市自慢の風物詩であり、御手洗川の名に恥じない美しい川をいつまでも守りたいものである。

〃コサギ住む御手洗川をいつまでも〃

（自然観察指導員）